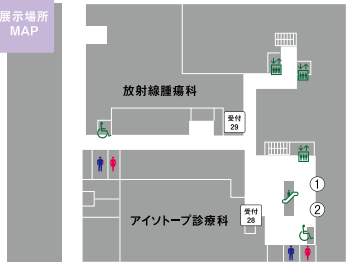


窓のない地下空間を
明るい印象に変える作品や、
検査・治療前にした不安な気持ちが
やわらぐような作品を展示しています。



展示作品リスト(大阪国際がんセンター所蔵)
① 宮本順三《チベットラサの雪頓節》1986年
② 宮本順三《青海の祭り》1988年

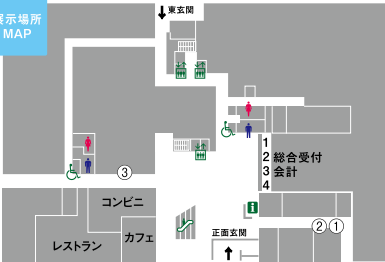
宮本順三

《チベットラサの雪頓節》(左)
《青海の祭り》(右)

「祭りと踊り」をテーマに、チベット族の伝統行事やチベット仏教の祭りの様子を色彩豊かに描いた作品群。窓のない地下空間に、光に溢れる空や人々の信仰と営みを想起させるような作品を展示することで、彩りと賑やかで明るい空間を演出。



緊張感や不安な気持ちを
癒すことができる
写真作品を展示しています。



① 田中幸太郎《抽象写真(花火による)》作品26
② 田中幸太郎《抽象写真(花火による)》作品24
③ 「BiG-i Art Collection 2013」公募入選作品展示



田中幸太郎

《抽象写真(花火による)》作品24

田中幸太郎(1901年 三重県生まれ 1995年没)
戦前から戦後にかけて、大阪を拠点に活躍した写真家。創作写真グループ「稚草社」の創立会員として活動。1955年頃からは移住した河内地域の風土をテーマに写真を撮り「シャモとレンコン畑—日本の原風景・河内」を出版した。そんなドキュメント写真とは別に、ここで展示する作品のような花火の光跡を撮影した抽象造形写真を発表、数冊の写真集にまとめている。

大阪国際がんセンター「絵画公募プロジェクト」入選作品



新進芸術家発掘のため、建畠哲氏、秋元雄史氏を審査員に迎えた絵画公募プロジェクト行い、巨大なキャンパスの入選作品1点を選出しました。

まつながえみ

《アカツキワンダーランド》

※展示場所については
2F展示場所MAPをご参照ください。

作品コンセプト

昼と夜の入り混じった夕暮れ時の光
風景が輝き出す瞬間
自然、空気、時間、出会った人々
いろんなものから力をもらって
前を向いて生きていく。
未来に向かって進んでいく。

選評

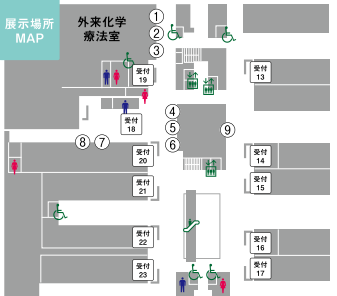
建畠 哲 (多摩美術大学学長)

病院の絵画というのは心理的な効果においてもなかなか難しい条件を満たさなければならないが、まつながえみは確かな技量で見事にクリアしているように思う。入選作品は画面の奥に明るい光をたえた樹木の茂みの光景で、逆光に浮かび上がる葉のシルエットの重なりが美しい。柔らかな色調がまとって、どこか不思議なファンタジーを感じさせる作品であり、病院を訪れる人たちの心を優しく和ませてくれるに違いない。

秋元 雄史 (元東京藝術大学教授・大学美術館長)

「アカツキワンダーランド」は、4.5m×2mの大作である。きっと診療室の大きな壁に似合うだろう。この作品は、日の出頃のほかに明るくなってきた時間帯の森を描いている。一種の幻想世界かなと思う。斜めから差し込む光が空間を満たして森全体に広がっていき、植物はシルエットになっている。朝を迎えるときの独特な静けさをもった時間帯だ。この作品は、診療を待つ人たちが癒えている人たちの心の憩いになるだろう。

診察に訪れる人が多く利用するパブリック性の高い空間に
「アートな病院」の顔となるような代表的な作品を展示しています。
大きな画面、力強い色彩など、印象的な絵を見ることで
生き生きとした気持ちになってもらえるような空間を演出します。



岡田修二《take#15》



高島彦志《大阪・風の記憶(2)》

高島彦志(1950年生まれ 2019年没)

2000年12月18～23日、大阪府と大阪21世紀協会主催の絵画コンクール「屏風に描く—大阪ビジョン21」が開催された。「21世紀にも引き継ぎ残したい大阪の風景」や「21世紀における大阪の望ましい都市イメージ」を二曲屏風形式で表現してもらおうという企画意図であった。この作品は、銀賞を受賞。1970年万博の年に、沖縄からはじめて大阪を訪れた描けるイメージ「元気」「ユーモア」「おもしろさ」「人なつっこさ」が太陽の塔とおぼしき形となって描かれている。

中辻悦子《合図—eyes—融合2》

中辻悦子(1937年大阪府生まれ)

この作品は1993年3月2～14日に大阪府立現代美術センター(enocoの前身)で開催された第12回現代版画コンクールの大賞受賞作品。2022年11月～2023年1月22日、神戸のBBプラザ美術館で回顧展「中辻悦子・起承転結」が開催され、同作品が展示された。「具体」の元永定正の生涯の伴侶としてその顕彰に努め、国際的な絵本作家として、また現代美術作家として美術グループを率い、精力的に活動する。



展示作品リスト

- ① 山本理絵《昴り》2000年
- ② 高島彦志《大阪・風の記憶(2)》2000年
- ③ 三村亘《Breeding 02-22》2000年
- ④ 中辻悦子《合図—eyes—融合2》1998年
- ⑤ 津高和一《向》1987年
- ⑥ 川崎ヒロコ《Tne impression K-1》1995年
- ⑦ 山中章堂《森羅萬象・絆(母と子)》1997年
- ⑧ 岡田修二《take#15》1999年
- ⑨ まつながえみ《アカツキワンダーランド》

岡田修二(1959年生まれ 滋賀県在住)

大阪府は1990～2001年にかけて国際現代造形コンクール「大阪トリエンナーレ」を開催。この作品はその第10回展(2001)で毎日放送賞を受賞。

前方水平に差し出された両手が、側面から、細部まで克明に緻密な描写で画面いっぱい大きく描かれている。手は、それだけでさまざまな表情をつくりだすものであるが、このように拡大されて描かれた手のイメージを見ると、私たちはその手から、それぞれが潜在的に持っているさまざまな感情や思い、記憶を呼び起こされるのではないかと、作家は次のように語っている。
——生物の身体形態に織り込まれた深い記憶。また絵画を見る側の経験にもさまざまな記憶が回想され、折り重なる。私は質の高い絵画イメージには、それを見る瞬間の中に、個々の生物の認識や思いを超えた全体的な深い水準の記憶が突如現れる瞬間があるのではないかと期待しており、そのような意識で制作している。そのためには瞬間的に強い衝撃を与えられるイメージが必要となる。題名の(take)は、映画撮影時にワンシーンを撮る際の用語である。

Osaka International Cancer Institute

The Artful Hospital Project 2023



表紙の作品: 中辻悦子《合図—eyes—融合2》
展示場所: 2F(MAP④)

鑑賞に際してのお願い

- ・作品にはお手を触れないでください。
- ・作品や展示風景の写真・ビデオ撮影はご遠慮ください。
- ・診察や検査にお越しの方の通行の妨げにならないようご注意ください。

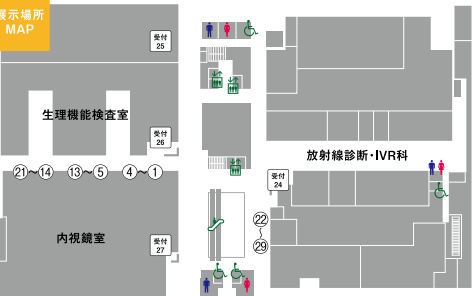
大阪国際がんセンターについて

当センターは、患者の視点に立脚した高度ながん医療の提供と開発を理念に掲げ、都道府県がん診療連携拠点病院・特定機能病院として国内トップクラスの先進的ながん治療に取り組んでいます。また、国際的な医療貢献、次世代がん医療の研究開発、がん予防の取り組みを積極的に推進しています。がんストレス対策としては、アート作品の展示、クラシックコンサートの開催など、患者さんの癒しにつながる取り組みを進めています。

お問い合わせ

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪国際がんセンター事務局
〒541-8567
大阪市中央区大手前3丁目1番69号
電話: 06-6945-1181 (代表) 内線5105
FAX: 06-6945-1900
https://oici.jp/
ガイドマップ企画・編集: 大阪府立立之子島文化芸術創造センター(enoco)

さまざまな人が行き交う場所であることから
懐かしさを感じる落ち着いた作品や、
患者さん同士や当センター職員との会話の糸口になるような
親しみを感じさせる作品を展示しています。



展示作品リスト

- ① 伊藤継郎《モンブラン》1974年
- ② 伊藤継郎《スペイン裏街A》1975年
- ③ 伊藤継郎《イタリーの風景C》1965年
- ④ 伊藤継郎《パリの屋根》1965年
- ⑤ 伊藤継郎《ギリシャ老人A》1965年
- ⑥ 伊藤継郎《ギリシャの神殿A》1965年
- ⑦ 伊藤継郎《風景》1970年
- ⑧ 伊藤継郎《桜鳥スケッチ》
- ⑨ 伊藤継郎《魚を売る女》1968年
- ⑩ 伊藤継郎《裸婦》1950年代
- ⑪ 伊藤継郎《石仏》1940年代
- ⑫ 伊藤継郎《仏像》
- ⑬ 伊藤継郎《臼付の仏像 I》1965年
- ⑭ 伊藤継郎《馬に乗る少女》1985年
- ⑮ 伊藤継郎《スペイン闘牛スタジアム》1975年
- ⑯ 伊藤継郎《牛》1965年
- ⑰ 伊藤継郎《のぼり竜》1965年
- ⑱ 伊藤継郎《手》1955年頃
- ⑲ 伊藤継郎《壺A》1965年
- ⑳ 伊藤継郎《とうもろこし》1965年
- ㉑ 伊藤継郎《ガラス器のバラ》1991年
- ㉒ 伊藤継郎《ホロホロ鳥》1960年代
- ㉓ 伊藤継郎《岩と鳥》1970年
- ㉔ 伊藤継郎《ホロホロ鳥》1985年
- ㉕ 伊藤継郎《クジャク(スケッチ)》1975年
- ㉖ 伊藤継郎《ペン画(鳥)》
- ㉗ 伊藤継郎《太陽と鳥》1991年
- ㉘ 伊藤継郎《蘭D》1965年
- ㉙ 伊藤継郎《花》

伊藤継郎

《イタリーの風景C》



《ホロホロ鳥》1985年



《花》



伊藤継郎(1907年大阪府生まれ 1994年没)

大阪の近代洋画史を語るうえで欠かすことのできない重要な画家や画塾、美術団体と関わりを持ち、戦前から戦後にかけて、大阪・関西の洋画壇、美術界を見守り続けてきた。
松原三五郎の天彩画塾、赤松麟作の洋画塾に学び、その後は信濃橋洋画研究所の小出楯重、鍋井克之、国枝金三、黒田重太郎、新制作の小磯良平、具体の吉原治良らと出会い、交友を深めた。
新制作を舞台に穏健で堅実な作品を描いたが、子どもや動物が好きで、戸屋のアトリエでは、児童絵画教室を開いたり、鳥や動物を多く飼っていた。展示では、鳥や動物、風景、人物、仏像、花などの小品をテーマごとに紹介する。